

---

# 一葉の君

境康隆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一葉の君

### 【Nコード】

N4172P

### 【作者名】

境康隆

### 【あらすじ】

半分に切られた一葉の写真。一葉の君は写真の向こうについて

だからこれはどうということのない話だよ。

捨てられない写真が一枚あって、僕はそれを何かある度に見返してしまふ。

そんなくだらない話だよ。

素敵な異性でも写っているのかって？

そうだね。僕には微笑んでいる先生が見えるけど、君たちにはどうだろう。何と言つても僕の持つているその写真は、真ん中で斜めに半分に切られているからね。

不機嫌な、写りたくって写っている訳じゃない。そんな顔をして写っている僕が、その斜めに半分になった写真には納まっている。

そこには辛うじてピースサインをした女の人の右手が写っているんだ。

これが先生の右手。

その右手が僕の顔の近くにあつて、その隣に居る先生の体温と相まって、この時僕は無愛想な顔をしたのを覚えている。高校生の時の僕だ。

撮ったのはクラスの誰か。文化祭の後の何げない写真だ。

それでいて未だに捨てられないそれを、僕は何かある度に見返してしまふ。

先生はこの写真を撮って数日後に死んだ。自殺だつて言われてたけど、生徒は誰もはっきりとは聞いてない。

まだ高校生の生徒の動揺に配慮して、死因は誤魔化したまま校長が全校集会で黙祷を呼びかけたただだからだ。まったくもってありがたい配慮だ。

お陰で僕は未だにこの写真が捨てられない。

だってこの写真を撮った時の先生は、とても楽しそうに笑っていたんだ。

何でこの時に気づいてあげられなかったんだろ。何かある度にそう思ってしまう。

分かっている。そんな偽善的な気分に乗ること、僕は自分を正当化しようとしているんだ。

いや、それも違うかな。たとえ右手一つでも、先生が写っている写真はこれ一枚だからだ。

今なら分かるよ。僕は先生が好きだった。大人の女性へのただの憧れだと、それも分かっている。だけどこの写真の中の不機嫌な僕を見れば一目瞭然だ。

先生と二人つきりで写っていたたった一枚の写真。不機嫌な顔で写った僕の横では、先生は確かにしつかりと笑っていた。僕はその笑顔の裏の苦悩になど何も気づかず、ぶっきらぼうに半分に切つて先生に残り半分を渡したのだ。

こつちはいらないし

そんな軽口を叩いたのも覚えてる。本当は手元に残したいのに強がったのだ。それでいて合わせれば一つになるものを、先生と持っているということにロマンチックなときめきを覚えて。

子供だったんだ。否定はしないよ。

そんなことを考えていると、玄関のドアが開けられた。

先生によく似た初老の女性が迎え入れてくれた。そう、僕は先生の実家を訪れたのだ。

この人は先生の母親だ。

母親は家にあげてくれて、そのまま先生が大学を卒業するまで使っていた部屋に案内してくれた。

あの子が出ていったままにしてあるんですよ。そう教えてくれた。空気すらその当時のままだと言いたいのか、母親はドアを開けてしばらくその場から部屋を眺める。

教え子さんが訪ねてきてくれるなんて初めてと、母親はやっと部屋に入る。僕は静かに後に続いた。

いい先生でしたか？ 慕われてましたか？ その質問に僕は答え

られず、代わりになるべく深く長く頷いた。  
情けない。大学を卒業し、就職までした社会人がこの程度も答えられないのだ。

お墓もありますけど、この部屋の方がねえと母親は辺りを見回す。  
何をしにきたんだっけ？ 墓参りに何かきたんじゃない。それは確かだ。

一番知りたかったのは先生の死因だったと思う。だけど今更そんなこと訊いていいのだろうか。

僕は自分の心を決めかねて先生の部屋を見回した。

目にとまったのは、見覚えのある写真だ。

写真立てに一枚。ぶっきらぼうに斜めに切られた写真が飾られている。

見間違うはずがない。僕の写真の片割れだ。

僕はその写真をじっと眺めた。

それはあの子が最後に写っている写真でしてね。

母親は感慨深げに僕と一緒にしばし写真を眺めた。

そして、ああお茶持ってきてますねと、母親はすつとドアから出ていった。

おかまいなくの一つも言えない情けない教え子は、先生の部屋に一人取り残される。

先生の写真と二人取り残される。

いや、取り残されたのは本当に僕なのだろうか？

写真の先生の左手薬指に写った指輪。それに僕はそのことを思い知らされる。

斜めに写真を切った時、僕は先生の指輪に気づいていただろうか？  
思い出せない。

僕は自分の写真を取り出して、先生の写真の横に並べてみた。

元に戻るはずもないその切り口に、僕はやっとこの写真を捨てる覚悟ができた。

これはそんなどうということのない話。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4172p/>

---

一葉の君

2010年12月16日10時06分発行